

紙つづて

令和の時代になって初めての正月を迎えた。おとそ気分がまだ抜け切らないでいる。カレンダー通りなら五日までが休みで六日の月曜日が出勤という人も多いと思うが、六日のイタリア



のイタリヤは「公現祭」の祝日である。幼子イエスに東方の三博士が

貢物をささげて礼拝する場面と云えば、なじみがあるだろう。西洋絵画の主題として多くの画家が絵を残している。

中でも巨匠ジョットの描く「東方三博士の礼拝」は、実にほほ笑ましい。三博士を導く「ほづき星」は、制作年代から彼が実際に見たハレー

空を見上げ新年をことほぐ

たけ 武 好

彗星だつたと言われている。

それから七百年近かつた一九八六年に、地球に接近したハレー彗星の探査のために、欧州宇宙機関によって打ち上げられた探査機は「ジョット」と名付けられた。二〇二〇年の今年、小惑星「りゅうぐわう」に到達した日本の探査機「はやぶさ2」が帰還する。

さて、イタリアでは五日から六日にかけての夜、ほづきに乗って「ベファーナ」と呼ばれるおばあさんがやって来て、良い子にはお菓子を、そうでない子には石炭を、つるした靴下の中に入れていくという。クリスマスに始まって二週間、イタリアの子どもたちにとっては楽しみな日が続く。家族とともに祝い、ごちそうを囲んで新しい年の幸せを願うのは、いずこも同じである。そして、この日にクリスマスツリーを片付ける。

(静岡文化芸術大教授)

2020.1.4